

学校におけるアレルギー疾患への対策に関する養護教諭の意識と現状

— ハウスダストをアレルゲンとするアレルギーを中心に —

高野 つくし
養護科学コース

1. はじめに

アレルギー疾患を有する児童生徒は近年増加傾向にある¹⁾。気管支喘息、アトピー性皮膚炎、通年性アレルギー性結膜炎・鼻炎の主なアレルゲンはハウスダストやダニ、動物の毛やフケであり、季節性アレルギー性結膜炎・鼻炎の主なアレルゲンはスギなどの花粉である²⁾。これらのアレルギー疾患は、食物アレルギー・アナフィラキシーに比べて学校生活管理指導表の提出率は低いが、罹患率が高い傾向にある¹⁾。学校現場には、アレルギー性鼻炎により机の上にティッシュペーパーを常備せねばならない子どもがいる³⁾ことや、学校には埃やダニなどの悪化因子が多数存在⁴⁾しており、これらをできる限り除去し、教室環境を常に整える重要性⁵⁾が報告されている。したがって、養護教諭は、食物アレルギー以外の疾患にも着目し、学校生活における症状の発症や悪化を防ぐための意識を高める必要があると考えられる。

保健室におけるアレルギー対策については、学校環境衛生基準⁶⁾において、ダニ又はダニアレルゲンは「100 匹/m³以下又はこれと同等のアレルゲン量以下であること」とされている。空気中のダニアレルゲンの大半が寝具由来である⁷⁾と言われており、保健室の寝具の衛生管理は重要である。

本研究では、ダニ・ハウスダストや動物の毛、花粉などをアレルゲンとしたアレルギー疾患に関する養護教諭の意識や、学校で行われているアレルギー疾患への対策の現状を把握し、養護教諭のアレルギー疾患への関心と学校でのアレルギー症状の発症や悪化を防ぐための意識及び行動との関連について明らかにすることを目的とした。

なお、本研究では、アレルギー疾患について、「学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン《令和元年度改訂》」²⁾に基づき、食物アレルギー、アナフィラキシー、気管支喘息、アトピー性皮膚炎、アレルギー性結膜炎（通年性、季節性）、アレルギー性鼻炎（通年性、季節性）の6つに分類した。また、本研究では、ハウスダストとは、「ダニの死骸やフンを含んだほこり」²⁾とした。

2. 研究方法

(1) 文献調査

J-STAGE や CiNii Research, Pubmed などを用いて、児童生徒のアレルギーの有病率、教職員のアレルギーに対する認識、保健室の衛生管理の現状、寝具等に付着するダニに関する情報を得た。

(2) 質問紙調査

養護教諭が行うアレルギー疾患への対策や、保健室の寝具の衛生管理の実態を把握するため、A 県の公立学校に勤務する養護教諭を対象に「学校におけるアレルギー疾患への対策に関する実態調査」を実施した。期間は2024年12月から2025年1月、Microsoft Forms の機能を用いて回答を収集

した。回答数は366件であり、うち有効回答数271件を分析対象とした（有効回答率74.0%）。

倫理的配慮として、茨城大学教育学部研究倫理審査を受審し承認を得た（許可番号24P2400：アレルギー疾患児への適切な対応を指向するための教員の基礎的知識向上に関する研究）。また、質問紙には、調査の目的と概要、無記名・自記式で行うため個人が特定されないことを記載した。

分析には、Microsoft® Excel® for Microsoft 365 MSO 及び IBM SPSS Statistics を用いた。

回答者の基本属性について、養護教諭歴は5年未満から30年以上まで幅広く分布していた。勤務校種は小学校が51.7%、中学校が30.3%、高等学校が10.3%、特別支援学校が4.8%であった。

3. 結果及び考察

（1）学校における各アレルギー疾患の位置づけ

質問紙調査より、学校が把握しているアレルギー疾患の報告者は、「アレルギー性鼻炎」は全報告者数の40.8%、「アレルギー性結膜炎」は全報告者数の33.0%であった。管理指導書の提出者は、「食物アレルギー・アナフィラキシー」は全提出者数の85.5%、「アレルギー性鼻炎」は全提出者数の8.7%であった。報告者数に対する管理指導書の提出者の割合について、「食物アレルギー・アナフィラキシー」は19.9%であり、その他のアレルギー疾患における割合は1%未満であった。

養護教諭自身が罹患しているアレルギー疾患については、全回答者のうち63.5%が何らかのアレルギー疾患に罹患していると回答し、「季節性アレルギー性鼻炎」が最も多かった（39.9%）。

養護教諭のアレルギー疾患についての学修経験では、「食物アレルギー」「アナフィラキシー」の項目の割合は96%を超えていた。「気管支ぜん息」「アトピー性皮膚炎」は70%台、「アレルギー性鼻炎」及び「アレルギー性結膜炎」はおよそ40～50%台であった。現任校において研修会等で取り上げているアレルギー疾患、日頃から気にかけているアレルギー疾患、教職員及び保護者と連携や情報交換を行っているアレルギー疾患においても同様の傾向がみられた。

これらのことから、学校におけるアレルギー疾患の対策は、食物アレルギー・アナフィラキシーに重点が置かれていることが考えられ、それ以外のアレルギー疾患は罹患者が多いにも関わらず、養護教諭が意識を向ける優先順位が低い傾向にあることが示唆された。

（2）養護教諭のアレルギー疾患への関心と意識及び行動との関連

質問紙調査より、アレルギー疾患への関心について、「とてもある」が46.5%、「少しある」が48.3%、「あまりない」が4.1%、「まったくない」が1.1%であり、肯定的な回答が94.8%を占めていた。近年の児童生徒におけるアレルギー疾患罹患率の増加を踏まえ、本研究では関心が「とてもある」と回答した養護教諭に見られる意識及び行動に着目し、「とてもある」と「その他（少しある・あまりない・まったくない）」の2群に分けてクロス集計およびカイ二乗検定を行った。期待度数が小さい場合にはフィッシャーの正確確率検定を用いた。

アレルギー疾患への関心との関連について、養護教諭自身の罹患の有無、学修経験の有無、現任校での教職員研修の実施との関連は認められなかった。一方、関心が「とてもある」養護教諭は、「その他」の養護教諭と比較して「アナフィラキシー」($p<.05$)、「気管支喘息」($p<.01$)、「通年性アレルギー性鼻炎」($p<.05$)、また「花粉」($p<.05$)、「ダニ」($p<.001$)、「動物の毛やフケ」($p<.001$)、「金属」($p<.01$)を気にかけている割合が有意に高かった。

さらに、アレルギー疾患への関心が高く、かつ、日頃からダニ・動物のフケ・花粉を気にかけて

いる養護教諭（以下、high-interest-care 群）は non-high-interest-care 群と比較して、教職員とは、「アナフィラキシー」(p<.05), 「気管支喘息」(p<.05), 「アトピー性皮膚炎」(p<.01), 「季節性アレルギー性結膜炎」(p<.001), 「季節性アレルギー性鼻炎」(p<.001), 「通年性アレルギー性鼻炎」(p<.001), 「通年性アレルギー性結膜炎」(p<.001), 保護者とは、「アナフィラキシー」(p<.05), 「アトピー性皮膚炎」(p<.01), 「通年性アレルギー性鼻炎」(p<.01), 「通年性アレルギー性結膜炎」(p<.05)において連携・情報交換を行っている割合が有意に高かった。学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン」を読む機会では、「教職員との連携」(p<.05), 「保護者との連携」(p<.05), 「研修会の時」(p<.05), 「児童生徒への指導」(p<.05), 「医療機関との連携」(p<.01)において読んでいる割合が有意に多かった。

以上より、養護教諭のアレルギー疾患への関心の高さは自身の罹患や学修経験による差はなく、より多様なアレルゲンへの配慮や、教職員・保護者・医療機関との情報交換と関連していることが示唆された。

(3) A 県立盲学校での実践

質問紙調査の結果を踏まえ、学校現場で確保可能な時間や機会を考慮し、児童生徒の命を守るために必要な、食物アレルギー・アナフィラキシーを中心に、アレルギー疾患全体の理解を含めた研修内容の検討と実践を行った。自身は、概要説明のスライド作成、事例の内容への意見、エピペンの使用方法を音声でナビゲーションするアプリの紹介などを行った。

学校や寄宿舎で起こり得るアレルギー症状への対応についての事例検討では、教職員が自身の経験に基づき意見を述べ、実際の対応を想定した議論が行われていた。エピペン保持者が入学した場合の緊急体制について、養護教諭との意見・情報共有もみられた。研修会は教職員同士の情報交換の場となり、学校全体のアレルギー疾患に対する意識向上のきっかけとなることが考えられる。

(4) 養護教諭が行う保健室の寝具の衛生管理の現状と課題

敷布団におけるダニ類は、チリダニ科が 97.0%を占めている⁸⁾。敷布団などの寝具だけではなく、日本国内では、ヤケヒョウヒダニとコナヒョウヒダニの2種が家庭塵ダニとして全国的に優位を占めている⁹⁾とされている。さらに、ダニは真菌を貪食して増殖し⁷⁾、室内温度 25℃以上、相対湿度 60℃以上が、ダニが繁殖しやすい環境¹⁰⁾である。また、ダニの学校環境衛生基準への導入は、ダニに起因するアレルギー疾患の児童生徒の増加に伴い、学校環境でダニ又はダニアレルゲンの測定を行い排除に目を向けることが必要になったという背景がある¹¹⁾。

アレルギー症状の発症・悪化防止には、養護教諭が「なぜその方法でアレルゲンを除去または減少させることができ、アレルギー症状の発生・悪化防止につながるのか」を理解し、適切に情報を取捨選択して衛生管理を行うことが重要である。保健室の寝具は洗濯や天日干しによる管理が多いが、ふとん干しの目的は、熱でダニを殺すのではなく、乾燥させてダニを増やさないこと¹²⁾であり、ある時間帯を超えた天日干しは再び布団の湿度を上昇させる¹²⁾ことも報告されている。しかし、現状では養護教諭の生活経験に基づいた管理が行われていることが多い。そのため、天日干しの役割等について理解し、寝具の衛生管理を行うことが望ましいと考えられる。これらのことから、養護教諭のハウスダストをアレルゲンとするアレルギー疾患への意識や知識を高めたうえで衛生管理を行うことが課題として挙げられる。

4. 結論

質問紙調査の結果から、学校におけるアレルギー疾患への対策は、主として食物アレルギー及びアナフィラキシーに重点が置かれていることが示された。一方で、アレルギー疾患への関心が「とてもある」養護教諭は、食物に限らず、ダニや動物の毛やフケ、花粉についても気にかけていることが示唆された。さらに、アレルギー疾患への関心が高く、かつ、日頃からこれらのアレルゲンを気にかけている養護教諭 (high-interest-care 群) には、教職員や保護者と情報交換を行っているという共通点が認められた。これらの結果から、養護教諭のアレルギー疾患への関心は、養護教諭自身のアレルギー疾患の罹患や学修経験の有無ではなく、教職員及び保護者との日常的な情報交換の有無と関連している可能性がある。また、教職員間の情報交換の場の1つとして、アレルギー疾患に関する研修会が有効であることが示唆された。

high-interest-care 群の養護教諭は、教職員や保護者との情報交換を通じて、学校や家庭などの様々な場面における児童生徒の姿を知ることにより、自ずとアレルギー疾患への関心が高まっていると考えられる。加えて、アレルゲンを除去する意義や方法について科学的根拠を理解したうえで取り組むことが重要である。これら2つの意識を養護教諭が持つことによって、学校全体のアレルギー疾患への関心が高まり、アレルギー症状の発症や悪化を防ぐことにつながると考えられる。

5. 謝辞

本調査を実施するにあたり、調査へのご理解とご協力を賜りました養護教諭の皆さま、A 県立盲学校の教職員の皆さま、甚大なご指導を賜りました、主指導教員の石原研治先生、副指導教員の竹下智美先生、渡邊雅彦先生をはじめ諸先生方に心より感謝申し上げます。

6. 引用・参考文献

- 1) 公益財団法人 日本学校保健会：令和4年度アレルギー疾患に関する調査報告書. 2023. <https://www.gakkohoken.jp/books/archives/265> (2025/11/07)
- 2) 公益財団法人 日本学校保健会：学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン《令和元年度改訂》. 文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課 監修, 2019. <https://www.gakkohoken.jp/books/archives/226> (2025/11/07)
- 3) 古谷成司 他：アレルギー疾患への理解・対処方法に関する 授業プログラムの開発. 授業実践開発研究, 11, 2018.
- 4) 山本八千代 他：アトピー性皮膚炎患児の学校生活に関する調査 一保護者の不安と学校に対する要望一. 小児保健研究, 66(4), 586-591, 2007, 7.
- 5) 勝二博亮：小児気管支喘息経験者からみた学齢期の心理社会的課題. 茨城大学教育学部紀要 (教育総合) 増刊号 (2014), 283-292, 2014, 8.
- 6) 文部科学省：【参考】学校環境衛生基準 (令和6年文部科学省告示第54号) 溶け込み版. 11 ページ, 2024.4. https://www.mext.go.jp/content/20240401-mxt_kenshoku-100000613_2.pdf (2024/10/28)
- 7) 日本臨床環境医学会：環境アレルギー問題の現状と課題 各種アレルゲンに対応した原因と対策の横断的取り組み. 環境アレルギー分科会報告書, 73 ページ, 初版 2021.10. http://jsce-ac.umin.jp/200725/files_jjce/2021_Kan_Allerg_HoukokuSho.pdf (2024/10/28)
- 8) 亀崎宏樹 他：屋内生息性ダニ類の敷布団における 種類相と布団内部の分布調査. Med. Entomol. Zool. 73(3), 137-143, 2022.
- 9) 高岡正敏：[総説] わが国における室内塵ダニ調査と検出種の概観. J. Acarol. Soc. Jpn., 9(2):93-103, 2000, 11, 25.
- 10) 一般社団法人 日本アレルギー学会：ダニアレルギーにおけるアレルゲン免疫療法の手引き (改訂版). 28 ページ, 2018. <https://www.jsaweb.jp/uploads/files/180618dani.pdf> (2026/01/30)
- 11) 社団法人静岡県薬剤師会 学校薬剤師委員会：学校薬剤師のための虎の巻 (学校環境衛生 Q&A) 2010. 19 ページ, 2010.3. <https://www.shizuyaku.or.jp/wp/wp-content/uploads/download/school-pharmacist/toranomaki-01.pdf> (2026/01/30)
- 12) 高岡 正敏：お父さん、お母さんが知っておきたい ダニとアレルギーの話. 株式会社あさ出版, 221 ページ, 第2刷発行 2025.5.

7. 成果

・学会発表

高野つくし, 石原研治「学校におけるアレルギー疾患への対策に関する養護教諭の意識と現状—ハウスダストをアレルゲンとするアレルギーを中心に—」日本学校保健学会第71回学術大会 (千葉) 2025年11月30日

・論文

高野つくし, 石原研治「学校におけるアレルギー疾患への対策に関する養護教諭の意識と現状—ハウスダストをアレルゲンとするアレルギーを中心に—」『茨城大学教育学部紀要 (教育科学)』75 : 343-352, 2026.